

栗田城跡発掘調査報告書

—愛知郡秦荘町栗田所在—

1980

滋賀県教育委員会

)滋賀県文化財保護協会

栗田城跡発掘調査報告書

—愛知郡秦荘町栗田所在—

1980

滋賀県教育委員会
(財)滋賀県文化財保護協会

序

戦国期の愛知郡内は京極・浅井氏と六角氏の間の争いの場であり、多くの戦いの場となっていました。このことは当地に城跡が数多くあること、なかでも六角氏の本城である観音城跡内に郭名として残された六角氏の重臣、目加田、平居氏などが居住していたことからも理解できます。

今回の調査は、この中の中世城郭史を明らかにする目的で調査を実施したところですが、結果は別の新たな古墳の発見という結果になりました。しかし検出された遺構が目的とは別であっても、当該地方の歴史を明らかにするための、新たな貴重な発見に変わりはありません。本書が、その一助になれば幸いです。

なお調査に際しては地元秦荘町教育委員会をはじめ、多くの関係各位の協力を得ました。ここに記して謝意を表したい。

昭和55年3月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長 沢 悠光

例　　言

1. 本書は県道日加田・湖東線の改良工事に伴なう栗田城跡の発掘調査報告である。
2. 本調査は滋賀県土木部の依頼により滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 調査は滋賀県教育委員会文化財保護課技師近藤滋を担当とし、現地調査は(財)滋賀県文化財保護協会嘱託北川浩が実施した。
4. 本書の編集は近藤が担当し整理執筆は、近藤、北川および林定信(調査補助員)が分担した。
5. 本調査の図面・写真及び遺物については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序

例言

1. はじめに.....	1
2. 位置と環境.....	1
3. 遺構.....	7
4. 遺物.....	11
5. まとめ.....	11

挿図目次

第1図 秦荘町位置図	2
第2図 栗田城跡及び周辺の遺跡	3
第3図 栗田城跡調査位置図	4
第4図 栗田城跡地形図及び遺構図	5
第5図 栗田城跡第1トレンチ遺構図、断面図	6
第6図 栗田城跡第2Aトレンチ（及びサブトレンチ）平面図、断面図	7
第7図 栗田城跡土壙断面図	8
第8図 栗田城跡第2Dトレンチ平面図、断面図	9
第9図 栗田城跡出土遺物（1）	10
第10図 リ (2)	12
第11図 遺物写真	13

1. はじめに

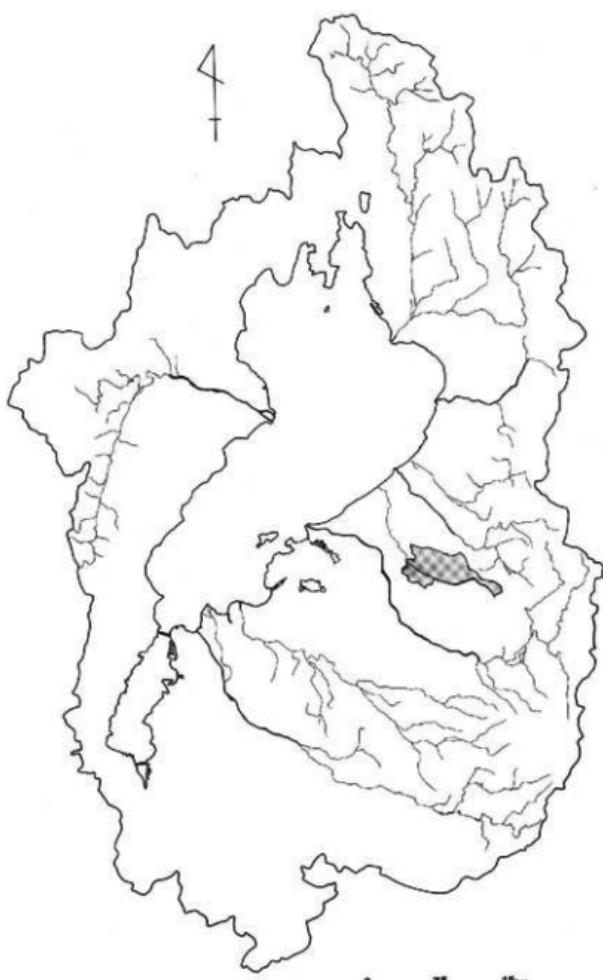
当調査は県道目加田・湖東線の改修に伴なう事業で、計画地の西側については前年度にほ場整備が実施され、東側については人家が所在すること、南の湖東町管内についても既に改修工事が施行されていることから、結果として発掘調査を実施することとなった。

調査地は愛知郡秦荘町栗田に位置し、現栗田集落の北西部の一画を占め、小字「千世野里」にある。また現況は本来屋敷畠であったところが竹籬化した状況にあり、竹籬内には比高1m前後の土壘痕が東西、南北方向を持って認められ、西側は土壘と田面の間に農業用排水路、北側は周辺より若干低く、かつ狭長な水田となって堀の痕跡を残していた。

調査は計画道路が城跡推定地の西端で、大部分が南北方向の土壘痕と重複することから、土壘の本来の規模、築造方法を明らかにすることを主たる目的としてトレンチによる確認を実施した。

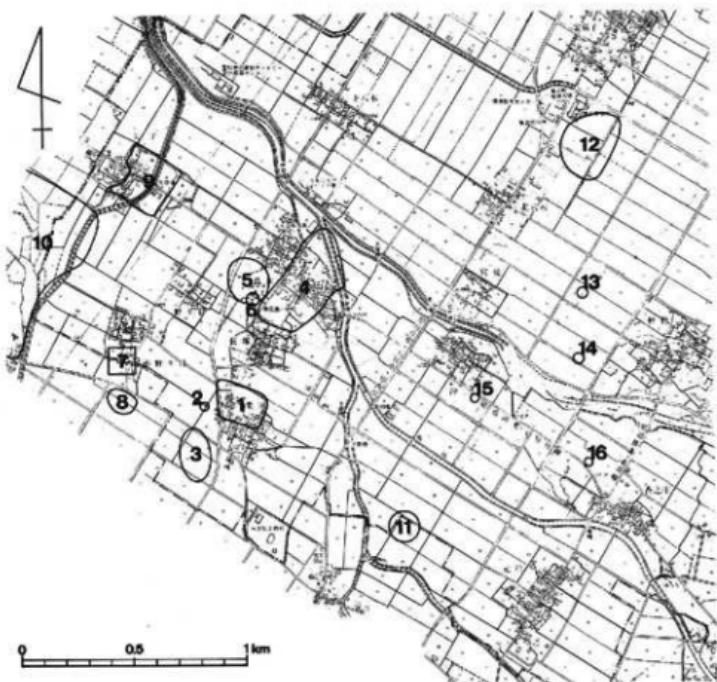
2. 位置と環境

栗田城跡は秦荘町の南西端近くにあって、愛知川町、湖東町の町界には接したところに位置しており、西側約1.0kmには灌漑用水路として近世に整備された安藤川を隔てて、古代大国郷の祖神であり、中世以降、多くの武人の信仰を集めた豊満神社が占地している。さらに当城跡周辺には、その具体的な実態はいずれも不明であるが、中世の居館跡として北約0.4kmに南殿・北殿の小字名を残す島川城が宇曾川沿いにあり、北西約1.0kmの矢守にも、やはり宇曾川沿いに矢守城跡がある。また、南約1.5kmには複郭式の土壘痕を残す畠田城跡と、その西には近江守護佐々木六角氏の本城である觀音寺城内の郭にその名を留める平居城跡があり、比較的、居館跡の高密度分布地となっている。この他、当城跡周辺は、極端に時代差があり、短絡的に同一組上に乗せて歴史的環境を述べることは差し控えたいが、先の島川には古代の官衙か寺跡と思われる大間寺遺跡、西の大字南野々目には大国寺の伝承を持つ白鳳時代から平安時代の野々目磨寺、そして当栗田周辺の土地区画は「古条里」とも云われる南北地割地域であり、大国郷壳券で著名な古代大国郷の一画にある。あわせて、さらに古くは位置図(第2図)にも示したとおり、北0.3kmにあって、以前は湖東北部で唯一の前方後円墳(後期)である長塚古墳をはじめ、栗田集落には接して栗田西、南古墳、塙原古墳などがあり、後期古墳群の一画でもある。



第1図 秦莊町位置図

0 2.5 5km



1. 栗田城跡 2. 栗田西古墳群 3. 栗田古墳群

4. 島川城跡 5. 大間寺遺跡 6. 長塚古墳

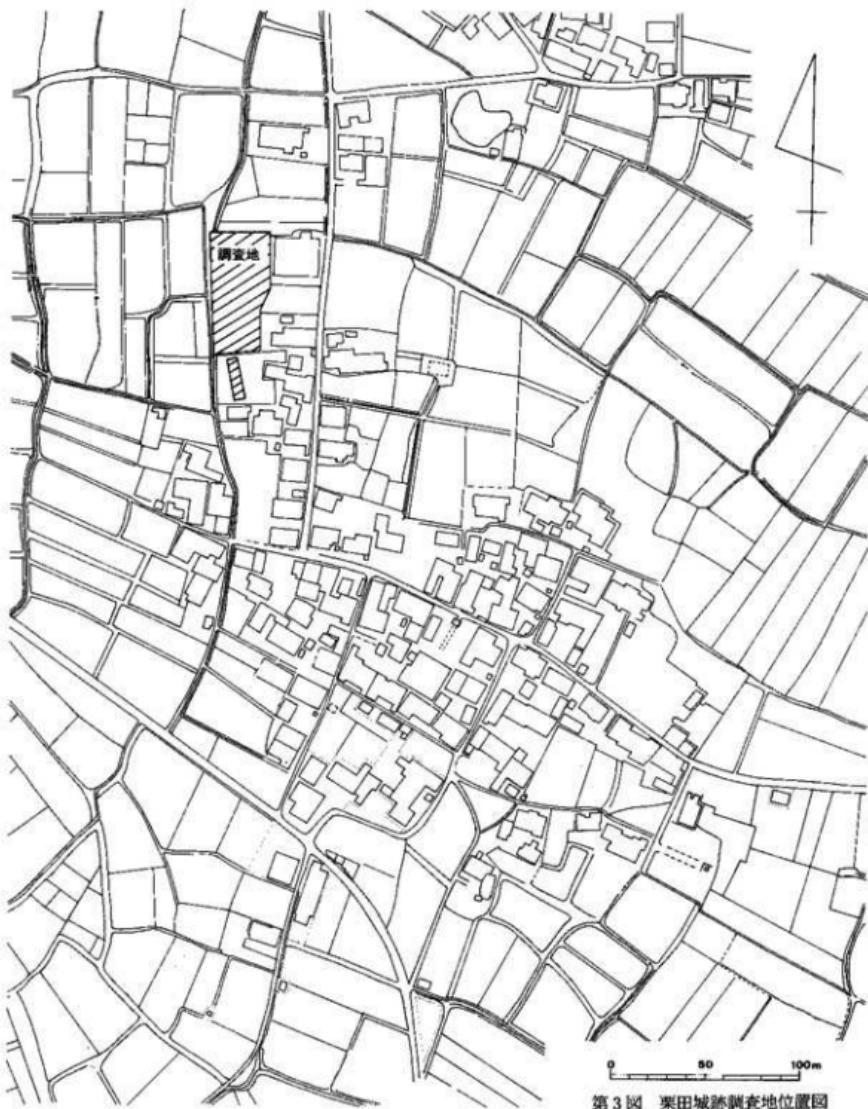
7. 野々日鹿寺 8. 塚原遺跡 9. 矢守城跡

10. 市道跡 11. 元持遺跡 12. 豊保遺跡

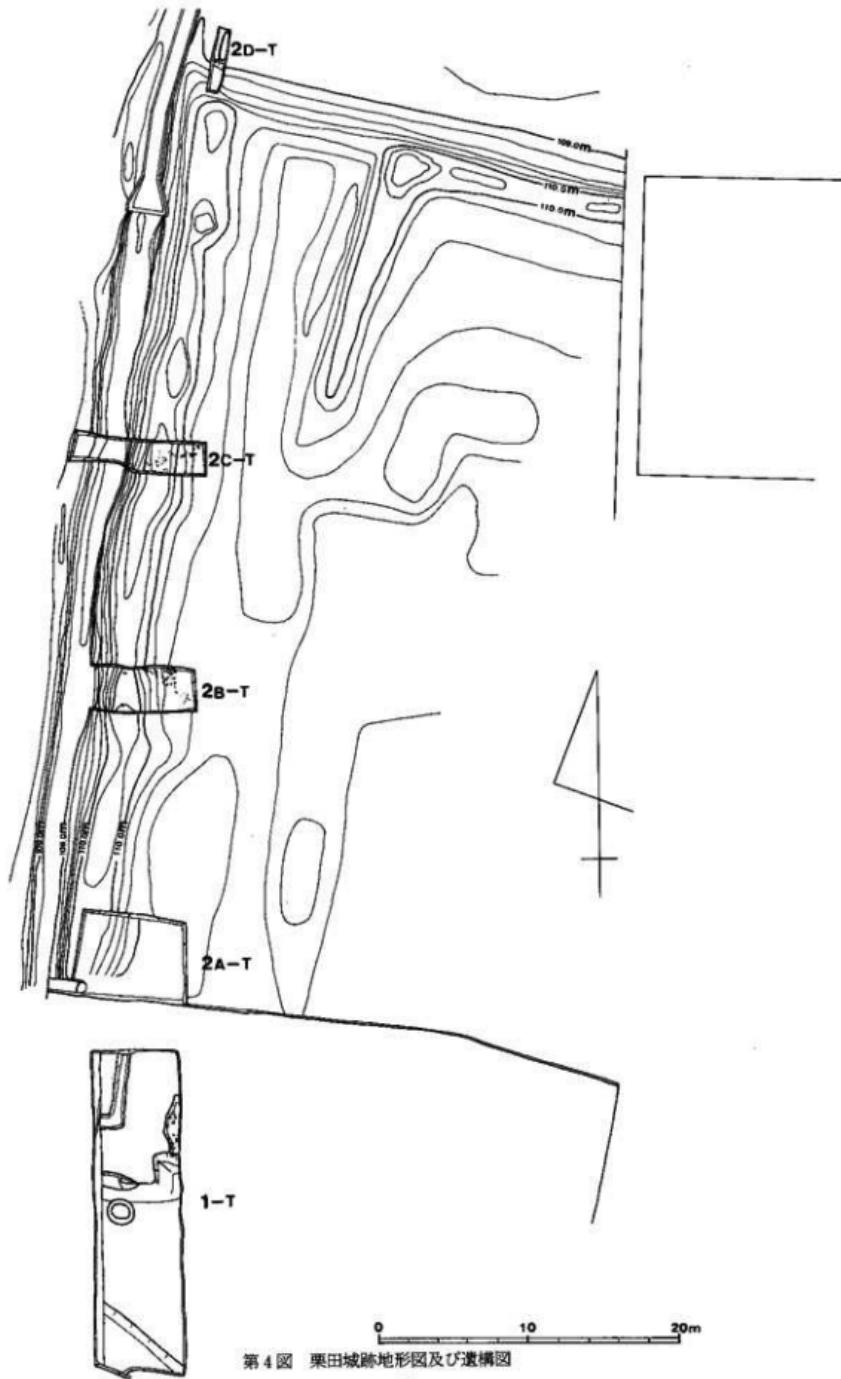
13. 大上塚遺跡 14. 植ノ越遺跡 15. 塚越遺跡

16. 猪塚遺跡

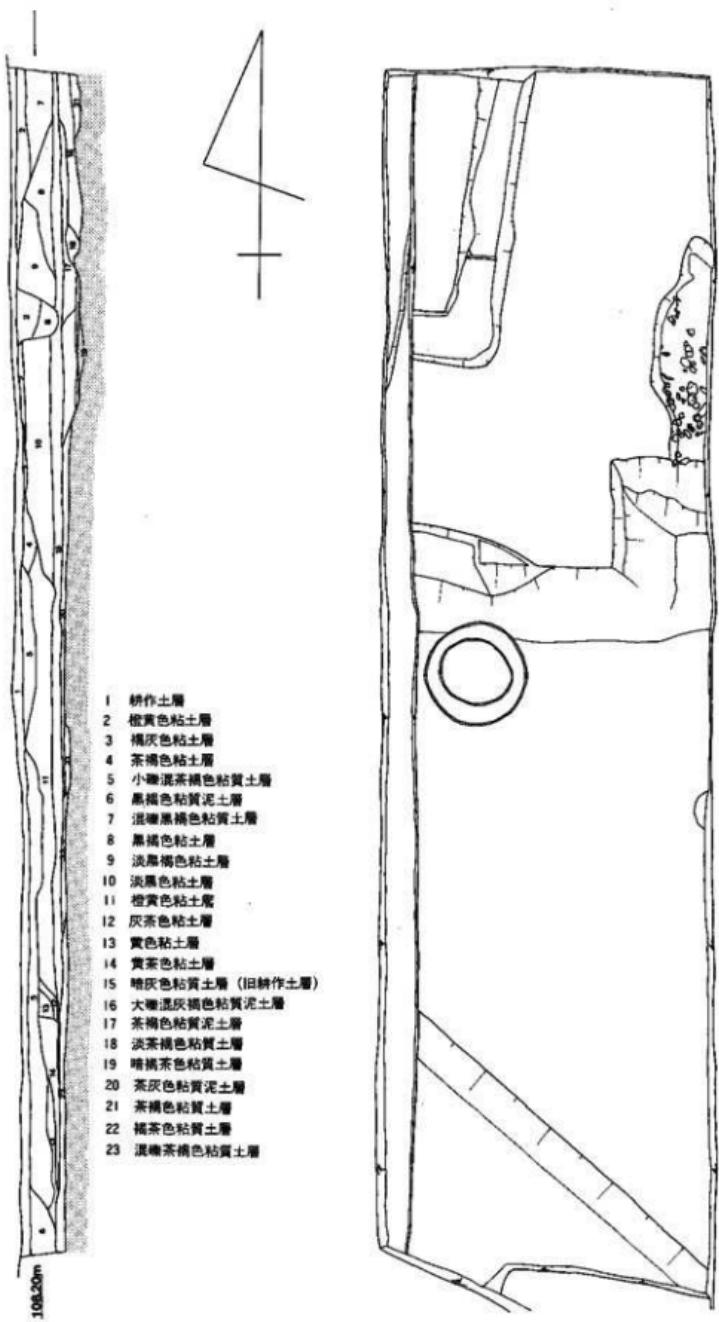
第2図 栗田城跡及び周辺の遺跡



第3図 栗田城跡調査位置図



第4図 栗田城跡地形図及び遺構図



第5図 栗田城跡第1トレンチ遺構図・断面図

3. 遺構

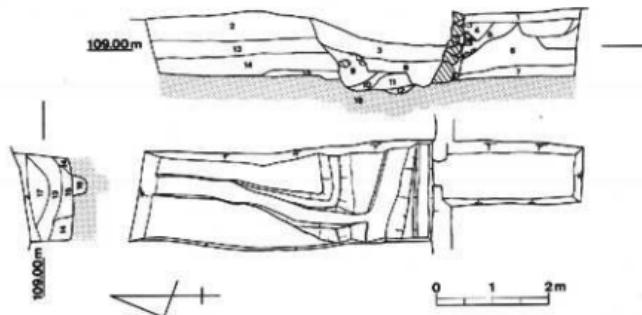
調査は、対象地の南側で現況宅地が石垣により区画されていることから、便宜的に南側を1区、北側を2区と区分し、1区の畠地に1ヶ所、2区の西側土塁と、北側土塁に4ヶ所の計5ヶ所のトレンチを設定し実施した（第4図）。

第1トレンチ（第5図）

耕土直下で直角に曲がる2条の溝と、棒を漆喰で巡らせた丸井戸1基が検出されたが、いずれも城跡とかかわりのない、屋敷に伴う遺構と考えられた。

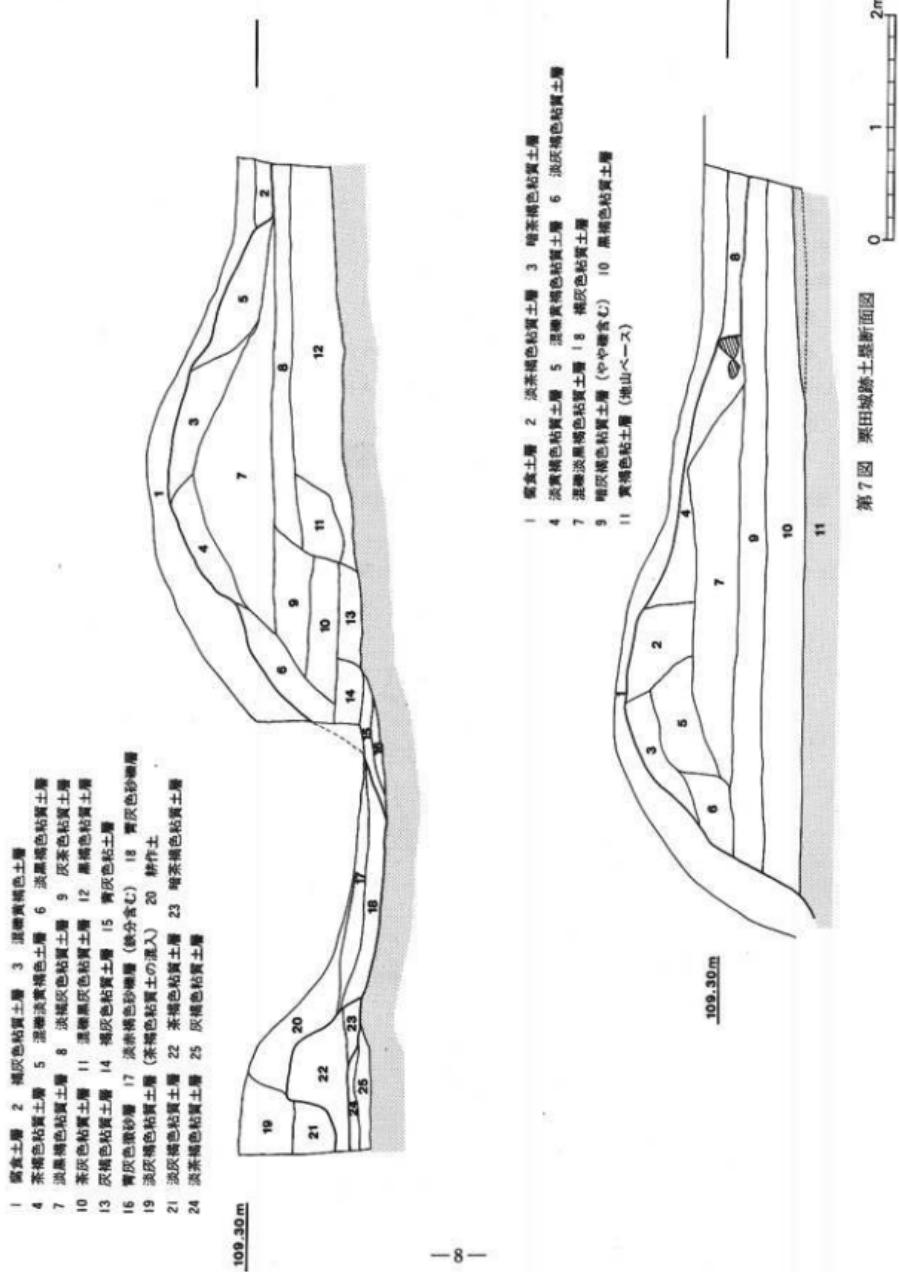
第2Aトレンチ（第6図）

2区の南端に設定したトレンチで、1区とは高さ約1.2mの石垣で区画されていた。また石垣は北の郭内の基盤を切って新たに築造されたことが明らかで、石垣築造後、前面は隣地との境界を兼ねた排水路として利用されたと考えられる。また、同トレンチ内に設定したサブトレンチでは、その具体的な性格は不明であるが郭の西辺土塁と並行する形で小溝が切



- 1 耕作土層 2 衛金土層 3 優金土層 4 耕作土層
- 5 淡黄灰色粘質土層 6 小穂混灰色粘質土層
- 7 小穂混淡黒褐色粘質土層 8 唯灰色粘質土層 9 唯灰褐色粘質土層
- 10 唯灰色粘質土層 11 小穂混黒褐色粘質土層 12 黒褐色粘質土層
- 13 淡墨褐色粘質土層 14 唯墨褐色粘質土層
- 15 小穂混淡灰黄色粘質土層 16 灰褐色粘質土層
- 17 乳灰色粘質土層 18 黄褐色粘質土層

第6図 栗田城跡第2Aトレンチ（及びサブトレンチ）平面図・断面図



- 8 -

第7図 栗田城跡土壌断面図

られ、その埋土上層に郭内の基盤土がU字型に流入していることから、あるいは郭外への排水路の一部とも考えられる。そして、この小溝は南で東西方向の小溝と合流し、かつ、この東西方向の小溝は壁敷界の溝の下層に痕跡をとどめていることから、石垣構築以前から東西方向の規制のもとで存在したこととなり、この意味においては現石垣が後天的な区画線ではなく、当初から何らかの郭内の区画線であったことが想定できる。そして東西溝は、さらに西側に傾斜していることから暗渠等により西側郭外の堀に続いていたと想像できる。なお当該南北溝内から土師片（第9図1～5）が出土した。

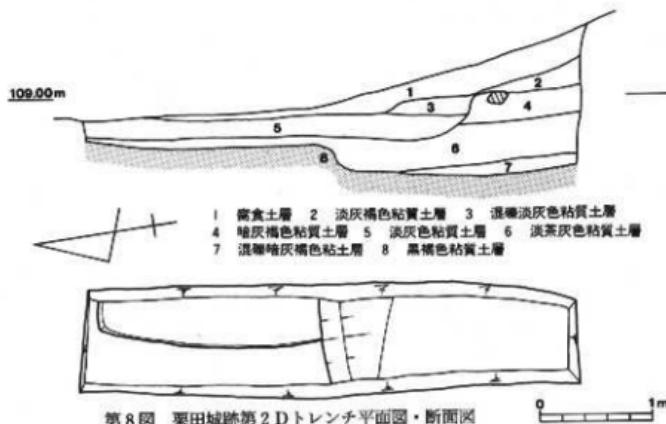
第2Bトレンチ（第7図）

西側土塁を東西に切る形で設定したトレンチで地山土の2層の基盤土から、礫混りの淡黒褐色粘質土を中核に、上層は外から内側に向かって順次盛土され構築されたことが明らかとなった。また土塁内側の法尻には土止めに利用されたと思われる人頭大の礫が検出された。

第2Cトレンチ（第7図）

第2Bトレンチの北約10mに設定したトレンチである。

土塁の基本的な構築手順は2Bトレンチと同様であるが、ここでは基盤土の西端で、まず基盤高までの整地をした後盛土を始めていることが明らかとなった。このことは当該土塁構築前に、その設計平面の一画にかかる状況で流路があったため、まず事前に流路を埋



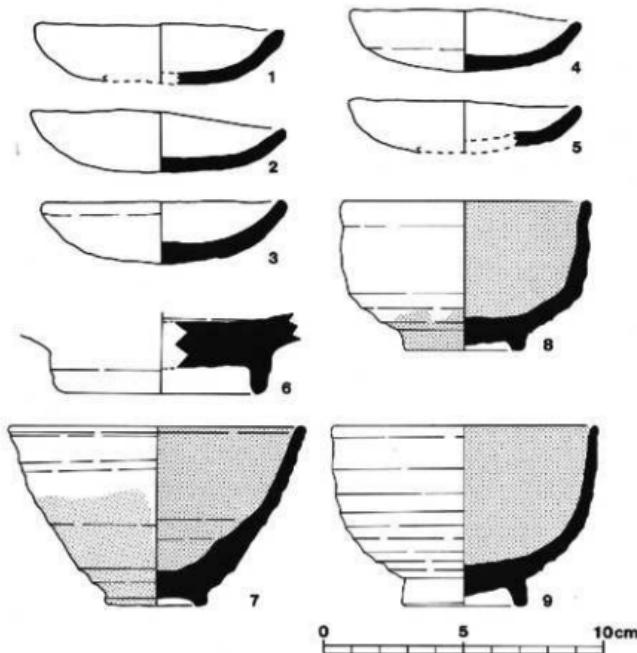
第8図 栗田城跡第2Dトレンチ平面図・断面図

め、その上で設計どおり土塁を構築したと想像できる。そして土塁構築後、改めて土塁外周に堀を巡らせたもので、旧流路の痕跡として基盤造成土、および外堀埋土の下層に若干ではあるが青灰色微砂層、青灰色粘土層があることから明らかとなった。また外堀の西側は、後に水田開発がなされた様子を示す畦畔、および旧耕土の関係が明確にとらえられた。

第2Dトレンチ (第8図)

城跡北辺を画する東西方向の土塁に対して南北方向に設定したトレンチで、東西方向の堀の痕跡が検出された。

以上、各トレンチの結果を総合すると土塁は幅4.5m(15尺)、高さ1.5m(5尺)、堀は幅3.0m(10尺)、深さ0.9m(3尺)の比較的整った尺度により郭の設計がなされていたようと思われた。



第9図 粟田城跡出土遺物 (1)

4. 遺 物

今回の調査では須恵器、土師器、陶磁器の3種の遺物が検出されたが、その大部分は第1および、第2 Aトレンチからの出土であった。特に須恵器はすべて第1トレンチからの出土品で、古墳時代後期、および奈良時代のものに大別できる。このうち古墳時代後期のものについては城跡西の田面下より栗田西古墳等が検出されていることから、更に付近に他の古墳があつて削平され混入したことが想像できる。しかし奈良時代のものについてはやはり西側田地に「安堂」等の小字があるものの、その実態は不明であり、今後に期待される。次に陶磁器については第2 Aトレンチからの出土品が多く、図中の黄瀬戸碗は石垣前面の排水路埋土より出土したものである。

最後に図中の土師片は先にも触れたとおり第2 Aトレンチ小溝内からの出土品で、当該城跡の造成時期を示す資料として注目される。法量は口径が8.3~9.1cm、器高2.2cmを測り、形態はゆるやかに内湾する体部から、口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸くおさめられている。

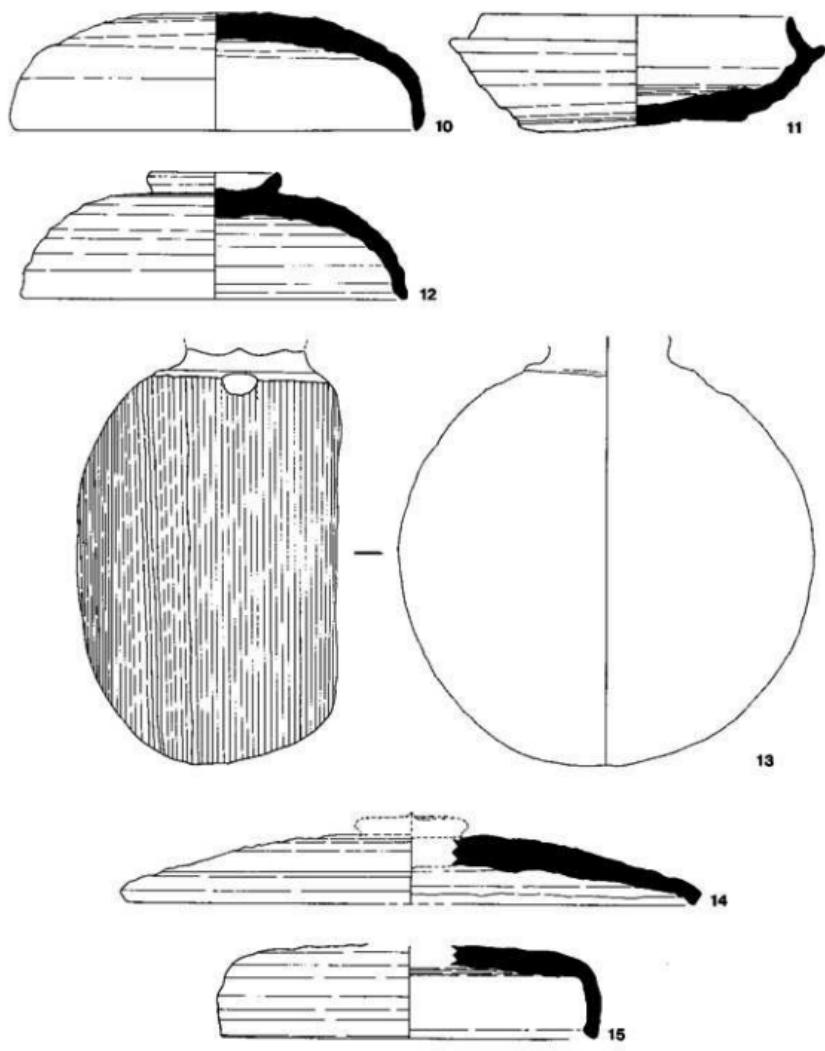
5. まとめ

今回の調査は計画路線が城跡西端を通過することから、土星そのものの構築方法、規模等を明らかにすることを第1義としたが、小規模調査にもかかわらず、更に1~2の興味深い結果を得ることができた。ここでは、これらのことと簡単に整理しまとめに変えたい。

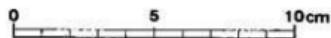
第2 Aトレンチにおける小溝の検出は、東西、南北いずれも小溝が同時に掘られたことは明らかで、南北小溝の検出位置を考えてみると、城跡の西を限る土星の内側で土星と並行した状況にあった。このことは東西方向の溝においても同一の条件下にあると判断されることから、この小溝、つまり現石垣付近に土星があったと想定できる。この結果、第2 Aトレンチは当城跡の南北隅と考えられる。

このことを念頭に置き現況と対比させると、当栗田集落の中央には集落を東西に分断する形で現県道があるが、この県道は周辺の歴史的環境から判断すると当城跡の構築時以前からのものと考えられる。この意味では城跡は現県道に面して築かれたと思われる。この結果、当該城跡は、その東西が現県道から今調査の西側土星、南北が今調査の1.2区界石垣付近から北側土星となりその規模は約60m四方と想定できた。

次に第2 Cトレンチで既に明らかにしたが、このような小規模な在地有力者の城館とい



第10図 栗田城跡出土遺物（2）





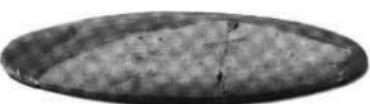
10



11



12



14



9



7

第11図 栗田城跡出土遺物写真

えども、築造に際しては比較的綿密な設計プランにもとづき丁寧に築かれていたことが明らかとなつたことである。

当城跡は「神崎郡誌」によると小倉源氏の支流栗田氏の居館で、永禄年間（1560年頃）以降は内藤帶刃なる人物が当地に居たとあるが定かでない。

昭和55年3月

栗田城跡発掘調査報告書

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

(財)滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社